

Title	<解題>位置づけられた身体をもつことと家(ホーム)がもつ意味 : フェミニスト現象学の視点から
Author(s)	稲原, 美苗
Citation	臨床哲学. 15(2) P.96-P.100
Issue Date	2014-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/29211
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

解題

本稿は、2014年3月1日、大阪大学スチューデント・コモンズに開催された研究会「北欧のフェミニズム現象学」の講演原稿を本学院生の高山佳子さんと浜渦辰二教授が訳したものである。リサ・フォークマーソン・シェル氏は現在（2014年3月時点）スウェーデン、リンショーピン大学の認知症研究センターの准教授で、北欧フェミニスト現象学における中心的研究者のひとりである。専門は、ジェンダー理論、メルロ＝ポンティの現象学、女性の身体性に加えて、近年では認知症や精神疾患、加齢、疼痛などに関する現象学的研究を展開している。なお、この講演原稿の和訳バージョンを『臨床哲学』に載せることに関して、シェル氏から快諾して頂いている。

私がシェル氏と初めて出会ったのは、英国女性哲学者の会（The Society of Women in Philosophy in the United Kingdom - SWIP-UK）の年次大会「身体性とアイデンティティ (Embodiment and Identity)」が私の母校の英国国立ハル大学で開催された2008年5月だった。その頃、私はハル大学の「身体をもつ主観性研究センター (The Centre for Research into Embodied Subjectivity)」でポスドク研究員をしており、学会の組織委員会のコアメンバーとして世話役をしていた。シェル氏は発表者ではなかったが、積極的に発表者と対話を交わしており、目立った存在だった。懇親会で彼女と話す機会があり、お互いの研究について語った。そこから、メールのやりとりが始まり、シェル氏から刺激を受け続けてきた。その後、フィンランドのヘルシンキ大学やスウェーデンのウプサラ大学ジェンダー研究センターで開催された学会やシンポジウムに何度も招いて頂き、学術的な交流を深めてきた。「いつかシェル氏を日本へお招きしたい」と長い間切望していたこともあり、今回大阪と東京での彼女の講演会開催を可能にして頂いたことに関して、本学の浜渦辰二教授と立教大学の河野哲也教授に心から感謝の意を表したい。

「フェミニスト現象学に何ができるのか？」という大きな問いを掲げて、シェル氏と私は語り合ってきた。その中で「フェミニスト現象学は女性の為の現象学なのか？」という疑問もでてきたが、私たちが出した答えはそうではなかった。女性を考えるということは一体どのようなことなのだろうか。それは、月経、妊娠、出産、閉経などを経験する〈変容する身体〉について考えることを可能にするということである。フッサールから始まっ

た従来の現象学では、健康な異性愛者の成人白人男性の身体や一般化された経験を前提としてきたため、〈変容する身体〉を記述することができなかった。しかし、フェミニスト現象学は、これまで医学的・生物学的な枠にはめて診断していた妊娠や出産などの女性の経験を捉え直し、女性が何をどのように経験しているのかという素朴な疑問を解き明かそうとしてきた。つまり、フェミニスト現象学を簡単に定義すると、女性の身体や経験の構造に関する二つの対立した考え方（生物学的・医学的な考え方 VS 社会的・政治的な考え方）を批判的に考えながら、彼女たち一人ひとりの〈変容する身体〉とその生きている経験を具体的に記述する学問である。そして、それは、従来の現象学研究の領域を広め、〈変容する身体〉の経験を知る可能性と新しい展開を試みており、さらに、人間と環境の関係性について考えやすくしてきた。フェミニスト現象学は、女性がどのようにこの二項対立型の世界を経験しているのかを記述し、その対立関係にあるもの間の関係を再考し始めた。

今回のシェル氏の講演では、フェミニスト現象学を応用し、女性、身体、そして「家（ホーム）」との関係について考察した。シェル氏の講演を聞きながら、私はプラトンの「コーラ」という考え方を連想していた。シェル氏にとって、「家」は常に身体と関係しており、そして、特に、女性と密接な関係を持っている。だから、「コーラ」という言葉を思い続けたのかもしれない。「コーラ（「子宮」という意味がある）」は「母親」であると、プラトンは『ティマイオス』の中で主張した。そして、「コーラ」は「父親」とも「子ども」とも関係を持たない方法で、自分の身体内部に新しい命を生成する能力を有し、その中から「人間」は生まれると考えられている。女性が「ホーム」と密接な関係があるのは、体内に「コーラ」を持っているからなのではないだろうか。「コーラ」の中には「胎児」が入っていて、外界の危険・影響から守られている。つまり、「ホーム」も「コーラ」同様に、私たち人間を外界の危険・影響から守り、身体とその脆弱な生命体を、外界を支配する秩序や権力から守る働きをしてきた。「ホーム」と「コーラ」を結び付ける過程で、公・私間の境界線は男女間の二項対立軸と一致しており、「公的」領域を男性的な空間として、そして「私的」領域を女性的な空間として捉えられてきた。つまり、これまでの伝統的な考え方では、「ホーム」を身体、家庭、自然として扱ってきた。多くのフェミニストたちはこの二項対立的な考え方を一方的に批判しただけだった。

この訳文の中で、「家についてのフェミニスト現象学は、記述可能な経験の領野を拡大し、これまで無視されてきた経験を注意深い記述にもたらす」と、そして、「位置づけられた身体」を持つことについて考察する良い方法になると、シェル氏は考えている。「ホーム」を再考すると、自己をある空間に位置づけることだとも捉えられ、さらに、生活世界そのものを考え直すきっかけになるだろう。「ホーム」を多層的に考えるフェミニスト現象学とはどのようなものなのだろうか。シェル氏が展開するフェミニスト現象学は、主にメルロ＝ポンティの現象学とフェミニスト思想の方法を応用し、既存の現象学が記述してこなかった経験のうち、とりわけ身体（女性）の経験についての分析である。ただし、今回の講演では「家に住まうこと」の経験を扱い、現象学的に分析を行った。それは、家の中での具体的な行動を分析の対象にすると同時に、人間のアイデンティティの問題へと拡張して考えることができる。また、社会・文化的規範と生活する身体との関係についても考察している。「ホーム」を現象学的に語ると、公私の二項対立的な枠を超え、公私の境界も徐々に崩壊していく。

改めて、シェル准教授の経歴を紹介しておこう。学部時代をストックホルム大学で過ごし、文学を学んだ。その後、ベルギーに渡り、ルーヴァン大学で哲学を学んだ。2004年、米国クラーク大学で女性学の博士号を取得し、2007年、デンマークのコペンハーゲン大学大学院主観性研究センターにて哲学の博士号を取得した。その後、スウェーデンに戻り、ウプサラ大学ジェンダー研究センターの研究員を経て、現在に至る。主な近著として次のようなものがある。

Edited Books:

- Käll, Lisa Folkmarson & Zeiler, Kristin (ed.) (2014) *Feminist Phenomenology and Medicine*. New York: SUNY Press.
- Käll, Lisa Folkmarson (ed.) (2013) *Dimensions of Pain*. London & New York: Routledge.
- Björk, Ulrika & Käll, Lisa Folkmarson (ed.) (2010) *Stil, Kön, Andrahets. Tolv essäer i feministisk filosofi* (Style, Sex, Otherness: Twelve Essays in Feminist Philosophy), Gothenburg: Daidalos.
- Käll, Lisa Folkmarson (ed.) (2009) *Normality/Normativity*, Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge.

- Bromseth, Janne, Käll, Lisa Folkmarson & Mattsson, Katarina (ed.) (2009) *Body Claims*, Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge.

Articles and Book Chapters:

- Käll, Lisa Folkmarson (Forthcoming 2013) "She's Research!": Exposure, Epistemophilia and Ethical Perception through Mike Nichols' Wit" , *Feminist Phenomenology and Medicine*, ed. Lisa Folkmarson Käll & Kristin Zeiler. New York: SUNY Press.
- Käll, Lisa Folkmarson (Forthcoming 2013) "Performativity and Expression: The Case of David Cronenberg's M. Butterfly" , *Vulnerable Bodies/Embodied Boundaries*, ed. Ann Grenell & Lisa Folkmarson Käll, Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge. Springer Publications.
- Käll, Lisa Folkmarson (2013) "Intercorporeality and the Sharability of Pain" , *Dimensions of Pain*, ed. Lisa Folkmarson Käll. London & New York: Routledge.
- Käll, Lisa Folkmarson (2012) "Att känna igen sig själv i varulven: Om den mänskliga gemenskapens gränser och begränsningar" (Recognizing Oneself in the Werewolf: On the Boundaries and Limitations of Human Community), Odstedt, Ella. *Varulven i svensk folktradition*, Stockholm: Malört Förlag.
- Käll, Lisa Folkmarson (2012) "Erotic Perception: Operative Intentionality as Exposure" , *Phenomenology of Eroticism*, ed. Jonna Bornemark, Södertörn Studies in Philosophy.
- Käll, Lisa Folkmarson (2011) "Reclaimad Röst – Ekos Eget Eko" (Reclaimed Voice – Echo's Own Echo), G(l)ömda historier. *Klassiska normer och Antik kritik* (Forgotten Histories: Classical Norms and Antiquity Critique), eds. Dimitrios Iordanoglou & Johannes Siapakas, Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge.
- Käll, Lisa Folkmarson (2010) "Fashioned in Nakedness, Sculptured and Caused to Be Born: Bodies in Light of the Sartrean Gaze" , *Continental Philosophy Review* 43:1, special issue on Feminist Phenomenology, eds. Sara Heinämaa and Lanei Rodemeyer.
- Käll, Lisa Folkmarson (2009) "Expression Between Self and Other" , *Idealistic Studies* 39:1-3.
- Käll, Lisa Folkmarson (2009) "A Being of Two Leaves – On the Founding Significance of the Lived Body" , *Body Claims*, eds. Janne Bromseth, Lisa Folkmarson Käll & Katarina Mattsson, Uppsala University Series in Gender Research: Crossroads of Knowledge.

- Käll, Lisa Folkmarson (2008) "Spår av könsskillnad: Luce Irigaray i dialog med Maurice Merleau-Ponty" (Traces of Sexual Difference: Luce Irigaray in dialogue with Maurice Merleau-Ponty), *Agora* 2008:3.
- Käll, Lisa Folkmarson (2006) "Sexual Difference as Nomadic Strategy" , NORA. *Nordic Journal of Women's Studies* 14:3.
- Käll, Lisa (2005) "Kinaesthesia, Self-affection and the Dual Structure of the Body" , *Philosophical Aspects on Emotions*, ed. Åsa Carlson, Stockholm: Thales.
- Käll, Lisa (1997) "Att iscensätta ett kvinnligt subjekt" (To Perform a Feminine Subject), *Dialoger*, ed. Tytti Soila, Stockholm: Aura

(解題 稲原 美苗)